

明日に伝える三六災害

川路・龍江の水害体験談と
子ども達の取り組み

1. 飯田市川路の皆さんによる座談会

水難の里を襲った未曾有の大災害	5
明日を生き抜くため、復旧に明け暮れた日々	15
されどふるさと。天竜は恵み豊かな川	19
コラム「湍流の子」より	21

2. 飯田市立龍江小学校の子どもたちの取り組み

児童のおじいさん・おばあさんの体験談	23
「川と人びとの暮らし」で子どもたちが学んだこと	34
天竜川のことを勉強して一。子どもたちの感想	37

飯田市川路の皆さんによる座談会

昭和36年(1961年)6月27日～28日、長野県伊那谷を梅雨前線集中豪雨による大災害が襲った。天竜川本流の氾濫で甚だしい被害を被った飯田市川路地区の人たちに、当時の様子を語っていただいた。

[参加者]

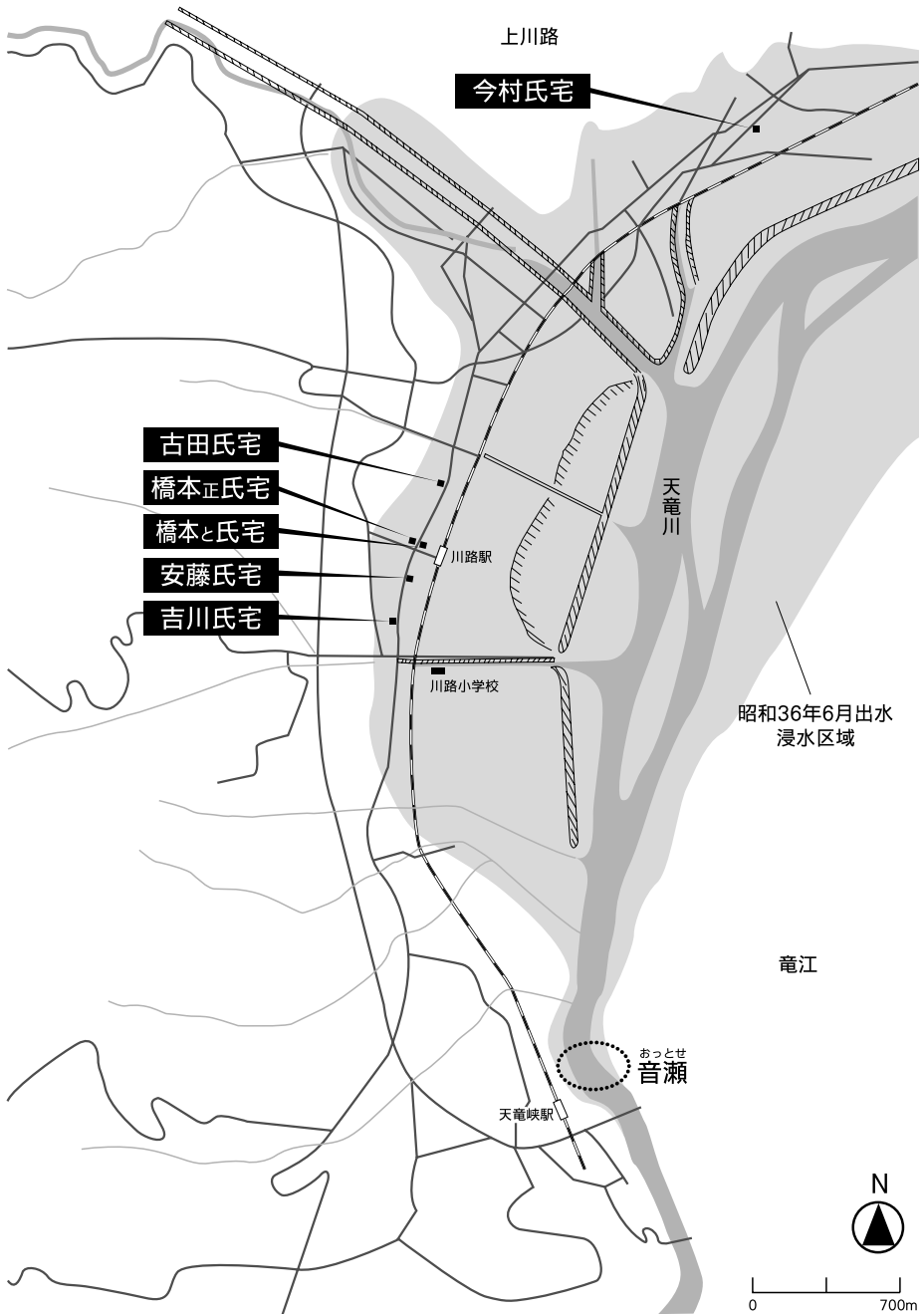
橋本 <small>はしちと</small>	正夫さん <small>まさお</small>	元自治会長	(36歳)
安藤 <small>あんどう</small>	常三さん <small>つねぞう</small>	前自治会長・元川路水防組合長	(34歳)
古田 <small>ふるた</small>	益美さん <small>ますみ</small>	元自治会長	(30歳)
今村 <small>いまむら</small>	邦彦さん <small>くにひこ</small>	前川路水防組合長	(27歳)
橋本 <small>はしちと</small>	とし子さん <small>としこ</small>	前日赤川路支部長	(22歳)
吉川 <small>よしかわ</small>	武夫さん <small>たけお</small>	現川路水防組合長	(19歳)

* ()内は三六災時の年齢

[司会／国土交通省天竜川上流河川事務所調査課]



平成17年12月20日 天竜川総合学習館かわらんべにて



図、三六災害時の川路地区

■水難の里を襲った未曾有の大災害

天竜川は、八ヶ岳連峰赤岳を水源とする諏訪湖の釜口水門から発し、遠州灘へ注ぐ流路延長約213キロ、流域面積5090平方キロの大河である。

伊那谷では、中央アルプスと南アルプスから、急勾配の三峰川、太田切川、小渋川などの多くの支川を集め、伊那峡、鷺流峡、天竜峡などの狭窄部と狭窄部に挟まれた氾濫原を流下する。天竜峡より下流では、泰阜ダム、平岡ダムの発電ダムを經由し、愛知県と静岡県の間境付近を佐久間ダム辺りまで通り、静岡県に入る。さらに奥三河、北遠の山岳地帯に進み、大千瀬川、水窪川、気田川等の支川をあわせて遠州平野に出てからは、一雲済川、安間川等を合流して太平洋に至っている。

その流れは、上流から下流に至るまで急勾配で流下するわが国屈指の急流河川である。天竜川沿いの伊那谷の地形は、東側には見事な河岸段丘が見られるものの、西側では扇状地の前面に段丘がなく、扇状地の先が直接河床に落ち込んで、峡谷や狭窄部となる。このため、狭窄部の上流は洪水があるたびに水がつく氾濫原が形成された。全国に知られた名勝地天竜峡のすぐ上流にある飯田市川路地区も、その典型である。

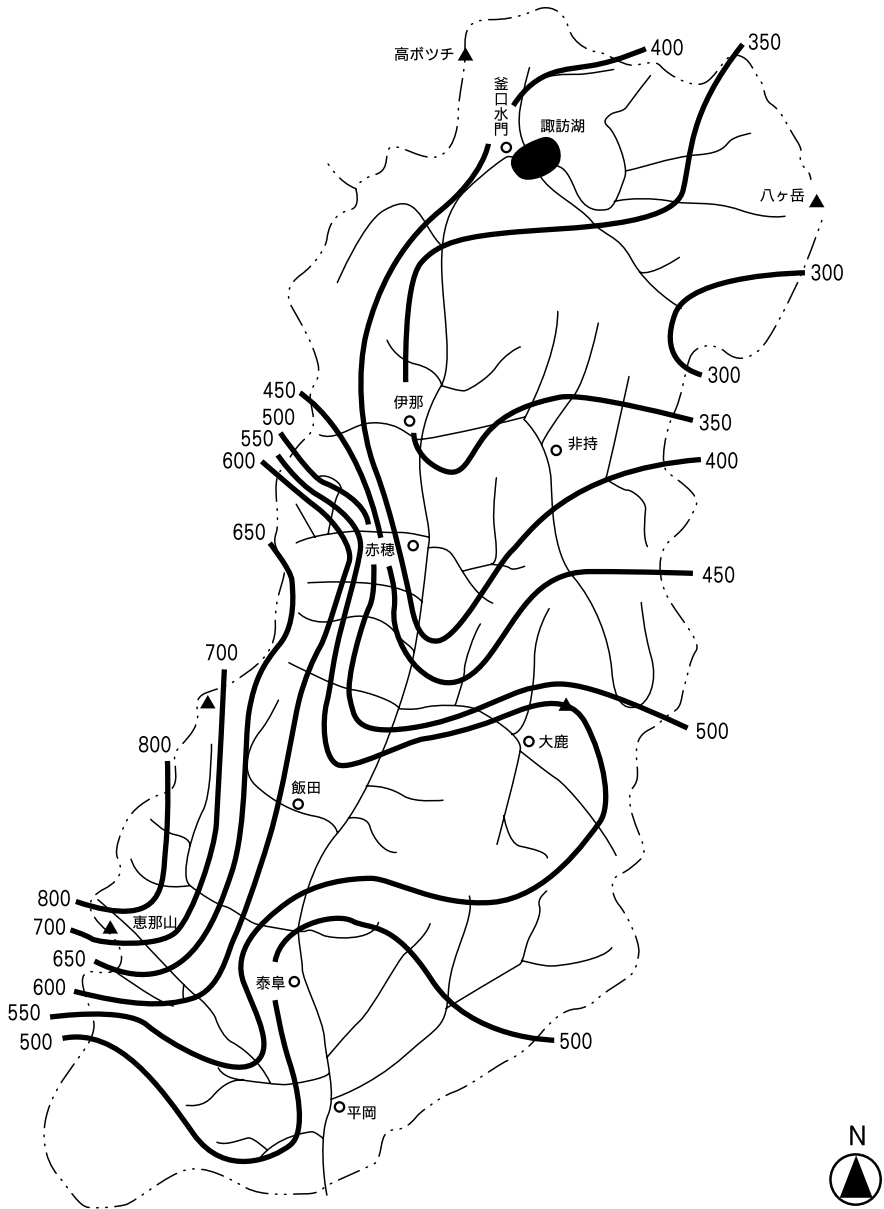
川路の歴史は、人々の洪水との戦いの歴史であった。この地区に残る記録では、「洪水又は出水ある」と記された年が、江戸時代に80回、明治時代に18回を数えている。昭和に入ってから、度重なる水害に悩まされたが、とりわけ昭和36年6月の集中豪雨による災害は、川路に壊滅的なダメージを与えた。いわゆる「三六災」である。

この年は、大陸南部から日本の南側で高気圧の勢力が強く、6月に入ってから雨らしい雨はほとんど降らなかった。しかし、23日頃から高気圧は急速に衰え、それまでなりをひそめていた梅雨前線が活動を始める。5月以来の異常乾燥で干害の発生も伝えられていたため、23日から降り出した雨は慈雨と喜ばれていた。

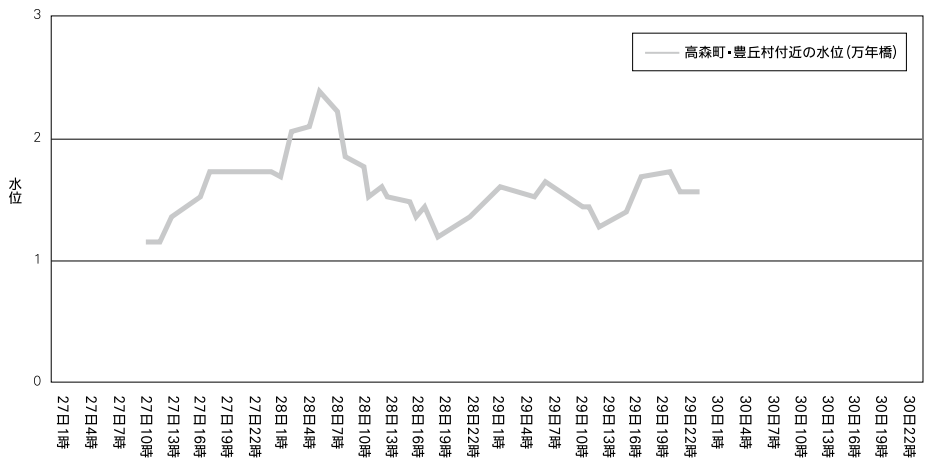
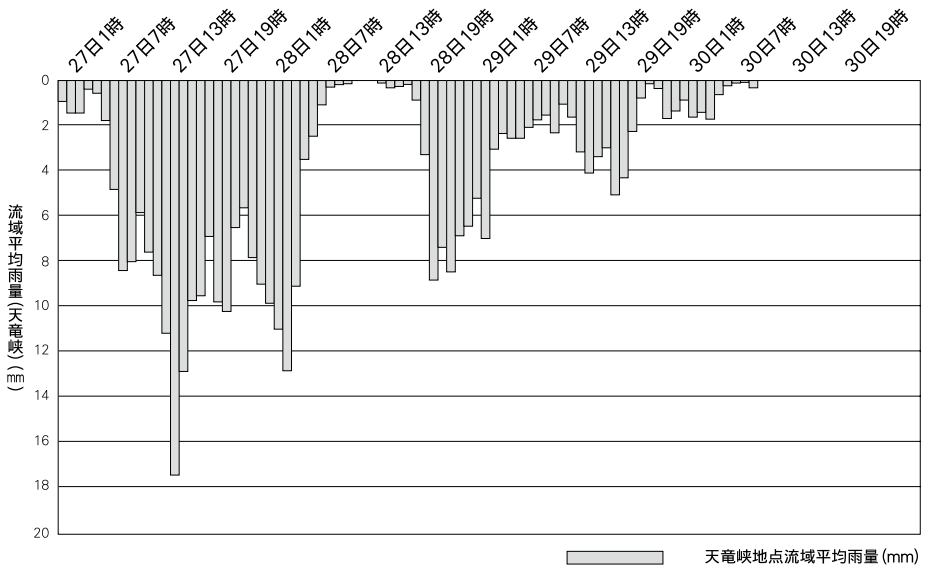
ところが、前線の活動が盛んになるにつれ、雨は次第に勢いを増した。四国沖を北上し始めた台風六号の影響もあったのか、26日からの伊那谷の日雨量は、50ミリから100ミリに達する。27日には、飯田市で日雨量325ミリ、1時間の最大雨量40ミリを記録した。

複雑な地質構造を持つ山間部では、いたる所で山崩れが発生し、その土砂が川を堰き止め氾濫させた。天竜川本川は、支川から流れ込んだ土石流で川底が上がり、満水となって堤防を決壊させた。盆地全体が水につかり、交通や通信網は寸断され、孤立した村では、食糧や飲み水さえ底をついた。

長野県では、この災害により136人もの犠牲者を出した。被害総額は340億円にものぼった。川路地区は、最高水位が4メートル余りに達し、全壊した家が83戸、半壊した家が45戸に及んだ。



図、天竜川流域(長野県)における等雨量線図 昭和36年6月23日～30日



図、降雨量と川の水位の変化

司会 三六災では、天竜川本川の中でもとりわけ川路地区の被害が大きかったとお聞きしています。皆さんの遭われた被害についてお聞かせ願えますか？

古田 この辺りは、昔から水がつきやすかったから、飯田市嶋という地籍名も昔あったくらいです。天竜川の流路が今とは違って、かつては島のようになっていたのですね。

橋本正 治水のため、淵の主を鎮めるために、人柱をいれたという伝説もあるほどだから。この土地の人は、ずっと水害との戦いでした。戦争が終わる間際の昭和20年、役場に頼まれて、私は川の近くのヒノキの林を伐ったことがあります。天竜峡の狭窄部に入る手前だったので、水の流れをよくしようとしたことでした。それだけ、この土地は水害が多かったのです。しかし、三六災は特別だった。ここに居る誰もがたいへんな思いをしましたよ。

古田 旧川路駅の近くにあった私の家は、三六災までに3回水がついています。その度に、家財道具も畳も2階に上げたものでした。6月27日、あまりに雨が激しいので、床上浸水を心配をして、午後休暇をとって家に帰ることにしました。しかし電車は時又までしか動かず、上川路を回って歩いて家まで帰りました。家はすでに床下浸水の寸前でした。近所や親戚の人の手を借りて、例の如く1階のものは全部2階へ上げました。夕方までにすべてを終えて、母や妻や子どもは近所の親戚の家に非難させ、私は父と二人で2階に泊まるつもりでいました。しかし、増水があまりに激しく、先祖の位牌と貴重品だけ持って、父と泳いで家から脱出しようとしたのです。でも、両手がふさがって泳げるものではありません。いったん家に戻り、それらを2階のいちばん高い場所に置いて、もう一度脱出を図り、やっとのことで水がついていない田んぼまで行って、軒伝いに親戚の家までたどりつき、そこへ泊めてもらいました。



昭和36.6.28 36災害「川路農協付近の水没」
(川路水害予防組合より提供)

あくる朝、少しずつだが水がひき始めたところでわが家を見ると、惨憺たるものでした。裏の小屋はどこかに流され、養蚕長屋はつぶれて県道へのめり出し、母屋は2階まで浸水の跡がありました。もちろん2階へ上げたものもすべて水浸しです。飼っていたニワトリも流されてしまっていました。でもまだ悲劇が続いた。28日の夕方4時頃だったと思います。大音響とともに、家が崩れ落ちました。2階へ上げた家財道具が水を吸って重くなっていたのでしょうか。2階まで水がついているうちはよかったが、水がひけると、柱だけになった1階はその重さに絶えきれなくなって、家全体が崩壊してしまいました。結局、すべてが泥水の中に浸かってしまいました。

結婚して5年ほどで、妻が持参した嫁入り道具もすべて台無しです。妻は泣き崩れていました。どこから手をつけるか途方に暮れながらも、29日から片付けを始めました。家具什器などは、相沢川の上流へ持って行って洗ったものの、使い物になりません。使えたのはせいぜい漆器と陶器くらいでした。ただ助かったのは、弟の会社のみなさんが、手伝いに来てくれたことです。心に大きな傷を受け、悲しみと憎しみと複雑な気持ちでいた私にとって、あれほど人の情けの有り難さが心にしみたときはありませんでした。

橋本と 私の家は、川路でもいちばん低いところにあつたので、床下に4回、床上に3回水がついたことがあります。36年当時私の家は、川路の駅前で衣料品店をやっていました。1階で店をやり、2階では蚕を飼っていました。27年に新築した家です。それまでの経験から、家財道具や商品を2階へ上げやすいように、階段も広くつくってありました。災害に遭ったのは、6月の28、29、30日に、売り出しをしようとして、衣料品をたくさん仕入れていたときでした。増水が始まったとき、蚕室の床をきれいに掃除して、2階のいちばん奥へ家財道具を、真ん中の部屋に店の商品を上げ始めました。何度も水害に遭い、水害対策ではベテランになっていたの、こ



昭和36.6.28 36災害「川路村駅前付近」
(川路水害予防組合より提供)

のときも諏訪湖の釜口水門が開いて、その水が川路へやってくる3時間の間に、すべての準備を終えました。これで一安心と、私たちは次男(2歳)のオムツ以外は何も持たず、主人の実家へと非難しました。

でも三六災のときの増水は凄まじいものでした。非難した家も危険になり、消防団の人が押さえてくれたはしご伝いに、2歳の子どもを背負って別の家へ逃げました。このときはもうオムツを持つ余裕などなかったのも、避難先の家でオムツを貸していただきました。本当に有り難かったです。

あくる日家を見に行ってみると、2階だけが泥海に浮いているような状態です。いつもの水害とは違って、水もなかなかひかず、一週間目にやっと泥を押しつけて家に入りました。家の中はお化け屋敷のようでした。2階の欄間まで水に浸かり、家財道具も商品もすべて台無しになってしまいました。川路銀座と呼ばれた駅前も、大量の泥と、各家から捨てられた畳や家財道具、腐敗物でいっぱいでした。私たちは何日もこのはきだめの中で生活するしかなかったのです。でも、あのとき宿を貸してくれた人、お見舞いをいただいた人、手伝いに来てくれた人の真心にはいつまでも感謝しています。

橋本正 うちもそれまで何回も水がついたことがあったけれど、三六災のときのように2階まで水がつくことはなかった。当時私の家は、川路駅国道沿いで、商売と農業を営んでいました。雨が激しくなり、洪水警報も出ていたので、阿南町に勤務していた私は、休みをもらって水害に備えていました。家財道具一式を2階へ上げ、母がご飯をつくって2階住まいに備えていたのです。一段落したと思っていたのですが、水はたちまち増水してきました。家中のものが見守る中、2階に上がった泥水は、商品や家財道具一切を飲み込んでいき、ぶかりぷかりと浮いてしまう始末です。とうとう、2階の腰の高さまで水につかり、もう家財道具どころではありません。子供と母を一刻も早く逃さなければと思っていたところ、消防団の人たち



昭和36.6.28 36災害「水没の川路村役場」
(川路水害予防組合より提供)

が急場でこしらえた筏で救援に来てくれました。これに母と子どもを乗せ、その後で父や姉も非難させました。残ったのは、私と応援に来てくれた弟たちです。2階の手すりに出て救援を待っていると、目の前を木材や小屋が流れていきます。周囲の人たちはすでに非難したようでした。手すりの上に登り腰まで泥水につかったので、屋根につかまって何時間も救援を待ちました。最後の筏に助けられ、家族が非難している家にたどり着いたのは、夜もかなり遅い時刻でした。家族が無事だったのが、何よりでした。

安藤 あの頃、私は消防団の副分団長をしていたので、筏のこともよく覚えています。消防の衆が、木材会社から流れ出した木材を集めて筏を組んで、夜の11時頃まで、家に取り残された人たちの救出にあたっていました。

橋本と 筏には3人までしか乗れないと言われ、でも家の中に1人残すわけにはいかないからと4人乗ったら、首まで泥水に浸かりそうになったと言っていた人もいました。

吉川 私と父が筏で非難したのは夜の10時頃でした。水が深くて、筏を操る棹が届かなかったから、電線を伝わりながら、筏で非難しましたものね。暗いから余計におっかなかったですね。

安藤 三六災のとき、私の家では牛を飼っていました。牛舎は一段下にありいちばん早く水がつくので、とにかく牛を避難させないといけなと思い、従兄弟といっしょに安全だと思われた農協のところに連れて行き、つないでおきました。それから家の片付けを始めたのですが、農協から有線で連絡が入り「牛が危ない」との知らせです。それからまた別の場所に牛を避難させました。家に戻ると、水がすっかりついてしまって、中に入れません。でも何とか中に入ると、私たちが外に出ている間に、家の女性たちが家財を2階に上げたり、タンスの中身を出したり、雨戸をたてたりしておいてくれた。2階まで水がつくことはないで一息ついていると、階



36災害「留々々沢峠より山城屋、田中屋」
(川路水害予防組合より提供)

段を一段二段と水がついてきます。近くの集落から駆けつけた弟が、道路の向こう側の家の屋根に登って「何をしているんだ。早く逃げろ」と叫びましたが、逃げようがありません。ふと見ると、2階の軒に長い竹の棹がありました。これを近くの電信柱と、私の家の二階の手すりへ縛りつけて、手近にあったロープを支えに濁流の上を渡ったのです。下を見れば怖さに身体が震えました。やっとの思いで隣家の屋根に登り、今度はハシゴをつかったりしながら、屋根を渡り歩き、必死の思いでやっと逃げました。

わが家も家財道具は全部水浸しです。ただ、2階の鴨居のところに裁物板を渡して、そこへテレビと米びつを置いておいたら、これだけは濡れませんでした。

橋本正 うちでは、2階の天井裏へ入れておいた掛け軸が濡れなかっただけだったな。

古田 あのときは、ただ増水してきただけでなく、水が渦を巻いていたから余計に怖かったですね。

橋本と 商品が流されているを見ていても、真っ直ぐ下流に流れるのではなくて、ぐるっと一回り回ってから流れていきましたから、かなり大きな渦だったと思います。ただ、うちの前には、大きなイチョウの木があったから、家が流されずに済んだのだと思います。

安藤 まさか2階まで水がつくことはあるまいとみんな考えていたから、2階に家財を上げた人の方がたいへんだった。平屋の人は、家財を持ち出すしかないから、かえって残ったものは多かったんじゃないかな。

古田 どこもかしこも水浸しだったから、避難先になった親戚の家々もたいへんだったなあ。多い家は5世帯ぐらいが身を寄せていたと思うよ。

橋本正 子どもの心にも痛手を残したと思うよ。水の恐怖と暗さの恐怖の中を筏で逃げて、恐怖症になった子どももいたな。雨が降るとそのときの記憶がよみがえっ



36災害「菅沼写真館より村田酒方面望む」
(川路水害予防組合より提供)

ていたようだった。

橋本と でも、疫病とかが出なかったのは幸いだったと思います。家の周りはかなり悪臭が立っていましたから。

今村 そればかりは不幸中の幸いだったかもしれない。しかしかつては、浸水により腐敗物や排泄物の栄養を含んだ土が運ばれたことで肥沃な地になり、この辺りの桑園が豊かだったとも言えるんだよね。

安藤 36年当時は、養蚕の最盛期は過ぎたものの、まだ蚕を飼っている家も多かったからなあ。他にあの頃の川路の産業といたら畜産だった。70戸くらいで牛を飼っていたと思いますよ。

今村 私の家でも畜産はじめ水稻、養蚕などの農業をやっていました。三六災のときは、田植えが終わった頃でした。27日の朝は、母と下條村の親戚の家へ出かけていました。正午頃、バケツをぶちまけるような雨になったとき、家の近所の人から電話をもらい、水がつきそうだと家のものが心配していることを知りました。出棺を待たず私一人家に戻りましたが、私が門島の駅から乗った電車が最後で、その後は不通になったようです。川路についたときには、かなり水がつき始めていました。帰宅出来て本当に運が良かったと思いましたね。

私の家は、これまで水についての経験から、明治の初め頃2メートルくらい土盛りをして、その下の段に耕地と畜舎がありました。三六災までは、せいぜいその下の段まで水がつくくらいでした。4月1日に結婚したばかりの妻にもそう話していました。しかし、土地に不慣れな家内はあたふたするばかりです。そんな家内に、とにかく牛のエサを確保するのが先だと、下の畑から草を刈り取って上の段に運びました。でも、あの時の増水の仕方はあまりに急激でした。今の時又港辺りの川の瀬は盛り上がり、まさに滝になってこぼれ落ちてくる感じだった。すぐにエサの刈り取りをやめ、牛を宅地の中でもいちばん高いところにあった蔵へ引っ張っていき、



36災害「川路小学校を南より望む」
(川路水害予防組合より提供)

つないでおきました。その後は、荷物を2階へ上げる作業です。

一息ついて、軒が波を打っている様子を見たときは、水圧のすごさを感じました。そして、みるみるうちに泥水が2階にいた私たちの膝までつかってきます。「絶対に大丈夫だ。おれはここに残る」という叔父を説得して、私は裏の竹やぶにハシゴを渡し、2階の窓から股までついた泥水の中を避難しました。その夜は、姉の嫁ぎ先の時又の家に泊めてもらいましたが、背中は脂汗がにじんで、寝つけなかったことを今でも思い出します。

翌々日の夕方に水がはけたのを見計らい、家に戻ると、牛は蔵につながれたまま死んでいました。一晚中牛の鳴き声が聞こえたと後で聞きました。家内の嫁入り道具も、全部泥水に浸かり、洗っても洗っても泥の汚れは落ちなくて廃棄処分です。牛もその時の状況を考えると気の毒なことをしたと思っています。災害後当分の間は、水につく夢を見続けた。移転した宅地が安全な場所になったと言うのに。

安藤 あのときは泥水の中を泳いだ豚もいたようで、動物は本能で泳げるものだったよ。

古田 家畜はいざとなれば泳ぐものだと知っている年寄りもいるようだね。信濃川の水害でも、年寄り衆は家畜をつないだ綱を切っていたそうだ。家畜は自分たちで泳いで高台まで逃げて助かったようです。若い衆はそんなことは知らないから縛ったまま。家畜はみんな死んでしまったという話を聞いたことがあるよ。

橋本正 ここでもニワトリなんかはそうだったな。鳥小屋を開けておいたら、鶏は屋根に登って助かっていたのをわしも見たよ。水害に遭ったときの知恵は、どうにかして残しておきたいものだね。



36災害「川路駅」
(川路水害予防組合より提供)

■明日を生き抜くため、復旧に明け暮れた日々

濁流がすべてを飲み込んだ川路では、水がひいた後、皆が途方にくれていた。水難の里に生まれ、何度も水害を経験した川路の人々にとっても、36災の被害は想像を超えていた。田も畑も壊滅した。家畜も失った。農家は生きていく術を絶たれた。家中を埋め尽くした泥は、どれだけかき出しても尽きないように思えた。

自分と家族の命があること、地域住民が強い絆で結ばれていること、それだけを救いにして、明日を生きていく意欲を振り絞った。

司会 三六災を生の体験として知らない私たちには、とても想像がつかないほど、凄まじい災害だったのですね。その後の復旧活動でも、たいへんご苦労をされたではありませんか？

古田 我が家は崩壊してしまったので、家を建て替えなくてはいけないというのが、いちばんの問題でした。使える材木はとっておいて、土地も知り合いが高台の土地を貸してくれることになったけれど、大工さんがいないのです。やっと頼めたのが、まるで素人の大工でした。造作が悪すぎて、手をつけていない部屋は一部屋のみとなり、その後全部改築しました。ずいぶんと余分なお金がかかってしまった。中部電力が見舞金として渡してくれたのも、大きな額ではなかったもので、あれからよく生活できたものだと思います。

安藤 泥が乾いてしまうと始末におえないので、復旧でいちばん最初に取り掛かったのが、家から泥を出す作業でした。せまい家で仮住まいをしていたので、少しでも早く、我が家の2階だけでも住めるようにしようと必死でした。それから2階に上げた衣類などを洗って、使えるものと使えないものを分けたけれど、使えないも



36災害「相沢峠、三区集会所」
(川路水害予防組合より提供)

のがほとんどでした。でも捨てるに捨てられず、今でも蔵の中に置いてあるものもあります。

なんとか2階に住めるようになったものの、完全に落ち着くまでにはかなりの時間がかかったように思うなあ。来る日も来る日も家財を洗っていたように思う。

橋本と 店の商品などは、自衛隊の皆さんが洗ってくれたのですが、とても売れるものはありませんでした。それでももったいないからと、うちでもとってあります。

安藤 今と違って、品物が無い時代だったからなあ。

今村 復旧といっても、泥出しだけでどれくらい労力がかかったな。親戚がみな来てくれて、嫌になるほどやった。泥出しと、柱や床、家財や衣類を洗うのに明け暮れたね。

橋本正 誰も彼も被害に遭っていたから、互いに支え合うしかなかったなあ。一軒手伝いが終われば、今度はどこの家だと、みなで手伝い合っていたよ。

橋本と 親戚が近くに住んでいるから、何をやるにも助け合っていましたね。女も瓦を持って運んだり、建前がある度に、皆で手伝いにいきました。

橋本正 一年間は家を建て直す以外なにもしなかったなあ。桑畑は泥をかぶっていて、蚕は飼えないしね。

安藤 うちの牛を飼っていたから、畜舎を建て直すのにもたいへんな思いをしました。

今村 私たち家族は、しばらく蔵を住居にして住んでいました。その後移転の話が出て、どこに移転するか土地探しに苦労しました。土地の下見に行ったとき、乾いた土地の有り難みを実感しました。まるで、金の上を歩いている気分です。水がつかないことがこれほど大きな価値だと、初めて分かりました。当時坪3000円だったその土地を、5000円で買いました。周囲からは「高い」と言われましたが、仕方がない。結局、私が移転した付近に、7軒の家が移りましたね。

吉川 そうやって土地を取得できた人たちは、ラッキーだと思いますよ。三六



36災害「四区菅沼さん宅前と自衛隊」
(川路水害予防組合より提供)

災からすでに45年になりますが、私は今でも借地で生活しています。大半の人は、自分の土地があってもその土地が使えなくて、今日までできています。昭和41年に、危険区域条例を飯田市が出し、自分の土地があっても家を建てることができなかったのです。

そうした経過もあり、現在の治水対策事業が行われてきています。すべての事業が完成したのが、平成15年の3月でした。その際、自分の土地も返ってきたわけですが、私も早く自宅を建て替えたいという思いがありましたから、10年ほど前に借地へ家を建ててしまいました。今日は6人ここに集まってもらいましたが、そのうち4人が同じ状況です。川路全体で見ても、いまだ借地に暮らしている人は多いと思いますよ。

安藤 みんな慌てて家を建て替えたからなあ。

吉川 災害直後につくった家は、隙間だらけで家の中に居て外が見えるような状態だったから、やっとこの10年で落ち着いて暮らせるようになったとも言えますけど。

古田 借地暮らしの家が多いというのも、まだ三六災の被害が続いているとも言えるなあ。私の家も、知人に畑を借りて建てたけれど、資材を運ぶ道がないものだから、柱なんかは全部人手で運び上げてつくりました。水道がなかったものだから、山から水を引いてずっと飲んでいたのが、やっと最近になって上水道が引かれたくらいですから。

吉川 私たちの年代では、すべてを解決することは無理だと思いますよ。治水対策事業が終わり、住宅ゾーンが整備されたことで、私たちの子どもの代が、もとの土地へ家を建て始めるようになったところですよ。今、7軒ほど建ったでしょうか。ようやく、そういった明るい芽が出始めたところですよ。

安藤 今暮らしている家も、耐震強度を調べてもらったら、1未満だった。誰もが、災害にあって使える材木を寄せ集めて家をつくったから、地震にも弱い家が今も



36災害「飯田城下グラウンド、河野建設大臣に陳情」
(川路水害予防組合より提供)

多いんじゃないかな。そんな面でも、三六災の後遺症はまだあると思うなあ。

吉川 治水対策事業が終わったことで、これからこの土地の有効利用を真剣に考えていきたいと思いますね。土地の一体的利用を目指して、かわじ土地管理組合、竜丘土地管理組合が、平成13年12月23日に組織され、土地利用が緒についたばかりです。平成20年の3月には、天竜峡インターも供用開始となり、これに28メートル道路がアクセスすることで、今後川路地区は大きく変わるでしょう。川路地区でも、竜丘地区でも土地管理組合長は、水防組合を経験した者がたまたま就いています。水害の教訓を生かし、今後この地区が豊かに発展することを祈ってやみません。

今、飯田市川路は堅固な堤防に守られ、新しい街づくりが進んでいる。45年前の大惨事の爪あとは、もはやないように見える。しかし川路の人々が、日々の暮らしで落ち着きを取り戻せたのは、ほんの最近のことである。36災が人々の心に刻んだ深い傷が、ほんとうに癒されるのはこれからである。



昭和38.8.29「川路小学校新校舎完成」
(川路水害予防組合より提供)



昭和55.11.27「36災害20周年記念(実朝歌碑)」
(川路水害予防組合より提供)

■されどふるさと。天竜は恵み豊かな川

洪水によりできた氾濫原には豊かな土壌が堆積する。天竜川は、川路の人々にとっても、ふだんは恵み多き川なのである。

司会 三六災以降も、昭和58年にも、川路地区はたいへんな被害がありました。しかし、皆さんのお話からは、この土地に対する愛着、愛情が感じられます。皆さんにとって三六災前の天竜川は、どんな存在だったのでしょうか。

吉川 確かに、川路は洪水に悩まされた土地ではありましたが、天竜川が豊かな土壌を運んでくれた恵み豊かな土地でもあったのです。戦前戦中の川路一帯は、日本三大桑園のひとつと自称するほど、桑畑がたくさんあり、養蚕が盛んなところだったと言われています。桑園には、人間の背丈よりはるかに大きく、親指大の枝も見事にはった桑が、戦後になってもたくさんありました。それだけ土壌が豊かだったのでしょう。

古田 今でこそ、この辺りの養蚕農家は2戸だけになりましたが、最盛期には200戸以上あったんじゃないかな。川の様子も今とはずいぶん違ったように思います。川原には石ばかりで、今のように木が生えているようなことはなかった。

今村 川の流れも速かったね。

吉川 中学生の頃は、天竜川で泳ぎましたよ。天竜峡の橋の下でもよく泳いだものです。

古田 3年ぐらいになると、いちばん流れの速いところを泳いで渡ったりしてね。子どもにとっては、通過儀礼のようなもので、そこが泳げれば一人前と認めてくれる場所がありました。



昭和23年頃「二区相沢峠付近」
(川路水害予防組合より提供)



姑や橋と帆掛け船

橋本正 昭和16年ごろは、渡し舟もあったな。

安藤 相沢川が合流するあたりでしたね。

橋本正 岸には船頭小屋があって、渡し舟専門の船頭さんが一人おった。

安藤 子どもたちは、とにかく川で遊んだ。夏の遊びといえば、天竜川での水泳だった。学校を終えたら、水浴びに行くのが子どもの仕事でしたよ。

橋本と 私も「おっとせ(音瀬)」まで行って泳ぎましたよ。岩から川に飛び込んだものです。上級生の男の子が、下級生が下流へ流されないように、ちゃんと川の中で見守ってくれていました。

古田 お腹が空いたら、龍江側の野菜畑からきゅうりやトマトをもらって食べてね。

今村 龍江の衆はみんな寛大だったんだね。川路の子どもが、野菜をかつぱらっても、学校に文句を言ったりしなかったから。あの頃の天竜川はほんとうにきれいでした。

古田 生活習慣も川とつながっていたと思う。お盆が終わると、お供え物を天竜川に流すんですよ。桃やリンゴが流れてきておいしく頂戴しました。

橋本正 泰阜ダムができる前は、帆掛け舟も行き来していました。飯田からは串柿を載せて天竜川を下ったようです。子どもたちにはとてもいい遊び場で、川は暮らしの身近にもあったのです。

古田 三六災に限らず、川路はこれまで水難の里でした。その記憶を留めつつも、この地域が先祖から私たちに受け継がれたかけがえのない場所であることを、私たちはありがたく思っています。そして、これからの時代を担うにも、そのかけがえのなさを残していかななくてはならないと思います。



昭和20年頃 天竜川「音瀬、死人岩付近」
(川路水害予防組合より提供)



昭和30年頃「旧川路駅前風景」
(川路水害予防組合より提供)

半鐘がなる！

飯田市川路中学校二年 長谷部美代子

「カーン、カーン」と半鐘がなる。二十八日午前3時頃、母が、
「美代子や早く直子たちを連れて、新屋へ逃げな。」

と言って、雨靴をさがしだしてくれた。履物はあちこちにちらばっていて、水はもう家の中へ入りそうだ。私も手伝って荷物を上げなくてもいいだろうかと思ったが、
「あぶないで早くきな。」

と叫ぶ母の声が水音にまじってとぎれとぎれに聞こえる。私たちを心配させないようにという母の気持ちなのだろう。表へ出たらもううぎの所まで水がついて来ている。父や母は水の増し具合、雨の降る量などを、疲れている中でみているのでしょう。

あまぐつをぬいで三人一つの傘で新屋までいった。

「おばさん、水がついて来て逃げてきたので、おらして。」といたら、
「さあさあ、早くこれで足をふいてあがっておいな。」

と言って、ぼろ布を出してくれた。

あがってしばらく雨の音を聞いていたが、こんな時にあったかい言葉を一つかけてくれるだけでも、人の情というものが、本当にうれしかった。おばさんが、
「ねといな。」

と言って布団を敷いてくれたので、妹たちは敷いてくれた布団へ、私はアッチちゃんと並んでねた。アッチちゃんは去年の十月生まれた赤ん坊だ。とても可愛い子だ。アッチちゃんの寝顔をみていたら、なにもなやみや悲しみはなく、幸福そうな顔で寝ている。いいなあアッチちゃんは、と思った。おばあちゃんもきた。

「うちももうだめだ。流れてしまう。」とため息をつく。

息を吸えばため息ばかり出る。私もなんだかさみしくなった。家の中を本流が流れているのだ。そして豚が五匹ばかりたすかっただけで、あとはみんな流れてしまったと言った。私は家がどうなったのか、おかあちゃん達は死にやせんかと心配でたまらなかった。

朝になりだいぶ人の声がするようになった。大勢の人が、
「初瀬屋があぶない。」と行ってさわいでいる。

ザーザーザーと音をたて、竹をかついで走る人もいる。たわら、かますなどがかついで歩いていく。私は障子の穴からそれをみていた。家の少し下の方は、屋根だけ出ている家が六軒もあった。白っぽく濁った水で湖水みたいだ。おばさんの話だと、B組の暢子さんの家は屋根まで水がついて、

「助けて下さい。今村周三」

と旗に書いて立てていて、警察のボートにきてもらって逃げたそうだ。文子さんの方は家がつぶれたとのうわさだが、どうしているだろうか。友達の事が急に心配になってきた。皆んな無事だといひだけだ。

あの大水は悪魔だ。人を苦しめる悪魔だと思つくと、こんな人の苦しみをなくすには、高い屋根まである様な堤防を作らなければ、そして、家のない人たち、あつても住めない人に家を建ててもらいたいと思つた。キャラメル箱が落ちていれば、中身があるかどうかとり合ひをするという。私はこんな所まで人間をつきおとした悪魔がにくらしくてたまらまい。

これから庭の泥出しだが、耕うん機もオートバイも自転車も泥に埋まっていた。泥と水と汗と悪臭の中で、みんなが力の限り働いた。しかし、雨足は激しく降り続ける。夕やみの中に天竜川、久米川はゴーゴーともものすごい音をたてて流木や石が流れ、大きくうねっていて、水は更に増しそうだ。母に言われ花御所へ行ったら、おばさんが、

「早くぬいでお風呂に入りな。」と言つたので入つた。

でてから牛乳をしぼるのを見ていたら、

「助けてえ、助けてえ。」

と女の人の声が家の方でするので、母じゃあないかと心配でならなかつた。

「そんなに心配なら、おばさんが手伝いに行つてやるは。」といつたので、

「おねがいます。」と言つた。文ちゃんが、

「僕がいくもの。」といつたら、

「文ちゃんはみんなといっしょ家においな。」といつて出ていつた。

不安と恐怖の一夜はあけた。皆無事であつた。家へ行ったら畳の上を水が通つていた。家の横、はなれの方、お蔵の方から水がどんどん入つていた。畳を洗つては二階へ二十七枚上げました。後は上げられなかつたので、外へつんでおいた。

あれから約二ヶ月たちました。一日一日と復旧工事は進んでいる様ですが、家の方は少し雨がふると安心して眠れません。ご飯もおいしくありません。

みんなが安らかに眠れる夜にして下さい。

(三十六年)

飯田市立龍江小学校の子どもたちの取り組み

飯田市立龍江小学校の4年生が、社会科の授業で「川と人びとの暮らし」について学習しました。水害の爪あとが残る地域に生まれ育った子どもたちに、身近な川について知ってもらいたい、自分たちの目と耳と足で地域のことを学んでほしい、そんな担任の先生の願いから、子どもたちは教科書には書かれていない自分たちの地域のことを学んでいきました。

その中のひとつに、子どもたちのおじいさんやおばあさんから、三六災当時の話を聞く機会もありました。それまではほとんど聞いたことのなかった事実にも、子どもたちはみな驚き、水の怖さを初めて知ったようです。

[児童のおじいさん・おばあさんの体験談]

いちのせ としのり
市瀬 利紀さん

まつした よしろう
松下 芳郎さん

いちのせ え
市瀬 だゑさん

はやし かつしげ
林 勝重さん

[担任の先生]小林先生



平成17年12月20日 春日神社にて



図、三六災当時の龍江地区

司会 三六災の時、龍江地区でもかなりの被害を受けたとお聞きしました。皆さんが遭われた被害はどの様なものでしたか？

市瀬利 私の家は御庵沢沿いであって、28日の午前中だったと思うが、うちの背後にある山が突然崩れたんです。幸い家は一段高いところであって、土砂は届かず助かりましたが、あのときは驚き慌てました。もともと御庵沢は、雨が降るとどえらい水が出る川なんです。山が崩れたときもの凄い音がしたものだから、何事かと表に出ると、山から崩れた土砂を含んだ沢の水が、植林して直径が5センチぐらいになった木をあっという間に飲み込み、流していました。表にいては危ないと、急いで家に逃げ帰りました。

松下 雨は23日ぐらいから降り続けていたねえ。

林 28日の明け方まだ降っていて、その日は天気がよかったように思うよ。

松下 そうだ。ちょうど雨間だったなあ。それまで雨が降って山が崩れたなんてことなかったから、それを聞いてとても驚いたのを私も覚えている。市瀬さんの裏山ではなく、うちの田んぼが崩れたと噂されたくらい、あの時は何が起ったのかわからず、みなパニックになったかもしれない。

市瀬利 崩れた土砂は、御庵沢の水を堰き止めていたから、あふれた水が田んぼに入ったらたいへんと心配で落ち着かなくて、合羽を着て田んぼの水見に何度も出かけました。幅30メートル、長さ80メートルほどにわたって山が崩れた跡は、木が何もなくなって、山肌が不気味でしたね。田んぼは端が少し崩れた程度で大丈夫でしたが、天竜川を見て唾然としました。どっどどと川が大波をうって流れているんですよ。木も石もゴロゴロと転がりながら、流されていました。川路の方はみんな水がついているようでした。

林 私は飯田市街に勤めていたけれど、自動車がなかったものだから、帰りに帰れ



市瀬利紀さん宅裏の御庵沢上流にて

ない。会社の車を借りたのですが、先輩が言うには、竜西はすっかり水がついて駄目だから、弁天橋を回らないといけないと言います。何とか明るいうちに家に戻れたのは幸いでした。

松下 交通手段だけじゃなくて、情報もなかったからたいへんだった。

市瀬利 林さんの田んぼがあった県道飯田富山佐久間線と天竜川の間は、桑園が多くて、そこは全部水でうまっていましたね。

林 幸い、家は無事でした。龍江で水がついた家は、2軒ほどだったように思う。大きな被害がなかったのは、天竜川本流が川路寄りを流れていたからじゃないかな。ただ、天竜川が増水したために、泥水が上がってきて、私の家の前の田んぼまで水がつかまりました。

市瀬利 うちの桑畑も1.2メートルほど泥に浸かったかな。

林 しかし、消防には召集がかかったものの、龍江の住民に避難命令が出たわけでもなかったね。

松下 理的条件もあるけれど、あれは情報がなかったからかもしれないな。あの頃、水害の情報といたら、水防組合が後で知らせてくれるくらいだったから。消防団には消防車がない、そもそも各家に電話がない。インフラの整備が全然ない時代でしょ。山の人の中には、天竜川が氾濫していることを知らない人もいたくらいです。私は28日の朝、家のすぐ上にある神社にいて、天竜川の様子を見ました。川路駅は屋根が見えるだけ、川路小中学校は2階が残っているだけでした。流れから数秒目を離すと、さっきまであった民家が水に飲み込まれて、一瞬にしてもくずとなっていたんです。流れの表面はそうは見えなくとも、河床の方ではもの凄い勢いで水が流れていたのでしょうかね。

市瀬さ 27日、28日とも、天竜川の方では、地響きのような音がして怖くてね。材木が帯びのようにまとまって流れてくるし、牛が顔を上げて悲しそうに鳴きなが



春日神社から天竜川を見て(松下さん)

ら流れてくるし、家の屋根はぷかぷか浮いているし、怖くて唾然として、ただ立ち
尽くすばかりでした。私は、それまで海を見たことがなかったけれど、海のように
と思いました。とても怖い海です。

松下 私は28日の雨間に表へ出てみたら、空が真っ黒で今にも落ちてきそうだっ
た。隣にいる人と話ができないくらい瀬鳴りがすごくて、大きな石がぶつかり合っ
ていた。川路小中学校も濁流の中の中でした。

市瀬利 あらゆるものが流されていましたよ。

林 赤土を混ぜたような色をした濁流がすべてを飲み込んでしまっ
てね。

市瀬利 ふだんはとてもきれいな川なのに。

松下 天竜川には、子どもの頃水泳によくいったものですよ。

林 上級生に泳ぎを教えてもらっ
てね。

市瀬利 天竜川の対岸の川路の子どもたちとはよく喧嘩になりました。子どもっ
ぽい対抗意識があったんでしょね。向こうの畑で梨を取ったりしてね。

松下 家の人の手伝いで、河川敷には桑取りにも行きました。ヨシの生えていると
ころにはオオヨシキリがいて、ヨシの生えていないところにはヒバリがいた。トビ
やタカは川の魚を狙っていてね。川の環境は、水も含めてとてもよかったように思
う。

林 河床も昔と比べたらずいぶん上がったね。秦阜ダムができてから、天竜峡の水
は5メートル上に上がったようです。桑畑が水に浸かることは何度もあったから、
そんなときは冬に土をおこしていたねえ。

市瀬利 土にたまったガスで、桑が息をできないからね。

松下 水がひいた後に残った泥は、目の細かいものだった。あれに、栄養もずいぶ
ん含まれていたんじゃないかな。三六災があまりに大きかったから、あまり語られ
ないけれど、昭和20年、32年の洪水もすごかった。そのたびに耕地の土を川にもっ



牛が流れていく姿を思い出し語る(市瀬さだ彥さん)

ていかれ、中部電力が補償をしてくれました。堤防の嵩上げなど恒久対策がなされたのは、昭和58年の災害以降ですよ。おかげで、三六災害当時より、この辺りの天竜川の水位は低くなりました。

林 災害のとき、水がついてしまったわが家の田んぼのあたり、天竜川から県道飯田富山佐久間線の間も6メートルの盛り土をしてくれたから、ひとまず安心です。これから、中小河川の整備が進めば、より落ち着いて暮らせる土地になると思います。

龍江地区は川路地区ほどの被害はなかったとはいえ、未曾有の災害に当時を知る人々は心を痛めました。自分たちの祖父母から災害の話を聞いた子どもたちは、一様に驚きを隠せなかったようです。しかし、子どもたちは、またその子どもたちへ自分が聞いた話を語り継ぐでしょう。そうして、土地に刻まれた記憶は、貴重な教訓として後世にも伝わっていくのです。

子どもたちがつくったカルタより(百句一覧)

- 天竜川 とあみ 投げると 魚がいっぱい (一輝)
- 友づりで あゆがいっぱい つれました (優佳)
- あちこちに 楽しく泳ぐ コイがいる (奈珠)
- 波ゆれる 天竜川を コイ泳ぐ (萌希)
- 水辺の楽校 魚がいっぱい にぎわうよ (洋介)
- 水辺の楽校 こいや魚が つれたかな (リオ)
- 楽しいな 水辺の楽校 魚とり (奈珠)
- 舟下り 川の水 とび たのしいな (優佳)
- 舟下り 舟がみんなを のせていく (由夏)
- 天竜川 ゆれるが楽しい 舟下り (里菜)
- 舟下り ゆれて流され 水かけられた (仁美)
- 天竜川 祭りにぎやか 楽しいよ (舞香)
- おとこたち はだかでいどむ まつりだぜ (有志)
- 天竜は はだかまつりで にぎわうよ (貴裕)
- 家族つれ 花火を見よう 灯ろう流し (美佳)
- 夏の夜 川をきれいに流れる 灯ろうたち (栞里)
- 灯ろう流し きれいな花火がドーンと出るよ (里菜・由夏)
- 灯ろうが 天竜川を 流れてる (リオ)
- 灯ろう流し 空を見上げらりゃ 花火さん (拓人)
- 親鳥が ちどりのたまご みはってる (穂波)
- 天竜川 いろんな鳥が とんでいる (拓人)
- 天竜川 しかの足あと いっぱいだ (純平)
- こうようが 天竜川を はさんでる (穂波)
- おだやかに 天竜川が 流れてる (有志)
- 天竜川 竜の伝説 のこってる (洋介)
- 天竜川 竜の伝説 今もある (愛美)
- 台風で 天竜川が あばれだす (拓人)
- 水害で 昔の家が 流された (純平)
- 天竜川 ていぼうこえて 大あばれ (貴裕)
- 三六害 昔のていぼう とびこえた (萌希)
- ていぼうが けっかいしたぞ みなにげろ (有志)
- くわ畑 四月のうちに どのの下 (菜緒)
- 三六で くわの木 すべて 全めつだ (慎哉)
- くわの木が うまっておかいこ えさ食べれん (穂波)

おそろしい 水がどんどん 近づくぞ	(里美)
川の水 知らせがなくて 急にきた	(優佳)
天竜川 みるみるうちに 湖だ	(葉里)
天竜きょう せまくて水が ぎやく流だ	(愛美)
どろ水が 天竜きょうで つまっちゃう	(優佳)
牛の声 いまも 耳に 残ってる	(摩耶)
流れてく ブタや牛を 助けたい	(愛美)
牛さんが 川でおぼれて たすけたい	(有志)
へびだって ひっしにまきつく くわの木に	(穂波)
うちの山 くずれて大変 じいちゃ にげ	(駿也)
音がして 山がくずれて にげだした	(里菜)
山くずれ あんきよがつまって ダムみたい	(駿也)
山くずれ こわくてこわくて にげだした	(一輝)
木を切った はだかの山は くずれたよ	(舞香)
大西山 くずれて 水が たまったぞ	(慎哉)
自然ダム 水をたくわえ 大ひ害	(大空)
天竜橋 上から どぞうを 見る ぼくたち	(拓人)
天竜橋 すぐ下にまで 水がきた	(舞香)
橋の下 どぞうのかべが くずれてる	(駿也)
どぞうさん かべがはがれて 泣いている	(奈珠)
天竜きょう どろ水のあと 今もある	(摩耶)
三つある こう水のあと 発見だ	(仁美)
発見だ しぶきそうには だろのあと	(菜緒)
しぶきそう 高い所に 水のあと	(里菜)
うっすらと ホテルのかべに だろのあと	(愛美)
三六の 水害の ひ が 建っている	(大空)
天竜橋 橋の下まで 水がきた	(一輝)
つつじ橋 三六災で 流された	(純平)
天竜を にくみ悲しむ 龍江村	(摩耶)
あふれ出た ミニミニ天竜 田んぼから	(洋介)
流れた木 みんなで 上げて水流す	(由夏)
水あふれ 公民館へ ひなんした	(美佳)
電車バス 水があふれて 運休だ	(大空・拓人)

かわじ小 水につかって 大さわぎ	(駿也)
山一つ ていぼう工事で なくなった	(洋介)
番入寺 土をとったら 工業団地	(里菜)
水ぼつが 起こらぬように 土もった	(貴裕)
ていぼうを つくってこれで ひど安心	(愛美)
ていぼうは 願いをこめて つくられた	(駿也)
工事して もう水害を なくそうよ	(一輝)
大ひ害 起こらぬように 願ってる	(大空)
八年の 年月かけて つくりあげ	(摩耶)
ダンプカー 二十二万五千台 休みなく	(由夏)
なんとなく 覚えているかも トラックを	(仁美)
運ばん道路 土手のために つくられた	(菜里)
さぼうダム みんなを守るよ がんばって	(有志)
四か所の かんしカメラが 見とどける	(萌希)
かんしカメラ 川の安全 支えてる	(里美)
カメラさん 天りゅう川を 見守って	(菜緒)
ていぼうが こわれていないか パトロール	(美佳)
パトロール きげんな時に サイレンだ	(慎哉)
桜さん 雪のふとんで ねているよ	(純平)
桜の木 天竜川ぞい いっぱいだ	(萌希)
秋になり ごくろうさまと ひりょうやる	(里菜)
ごくろうさま きれいな花を ありがとう	(一輝)
桜街道 春には桜が まんかいだ	(拓人)
桜さん 毎年きれいに さいてるよ	(愛美)
桜街道 桜の花は 色いろと	(里美)
六年生 すごい名前を 考えた	(リオ)
てんばく岩 龍江と川路の 間だよ	(慎哉)
天ばく岩 今でもあたまが 残ってる	(菜里)
四年生 調べて聞いて 学んだよ	(仁美)
わたしたち たくさん聞いて 匂にしたよ	(里美)
楽しいよ 四年みんなの えがおさく	(奈珠)
まとめした 四年の教室 紙だらけ	(穂波)
四年生 かるたづくりを かんばった	(美佳)



龍江小4年生の子どもたちによって作られたカルタ

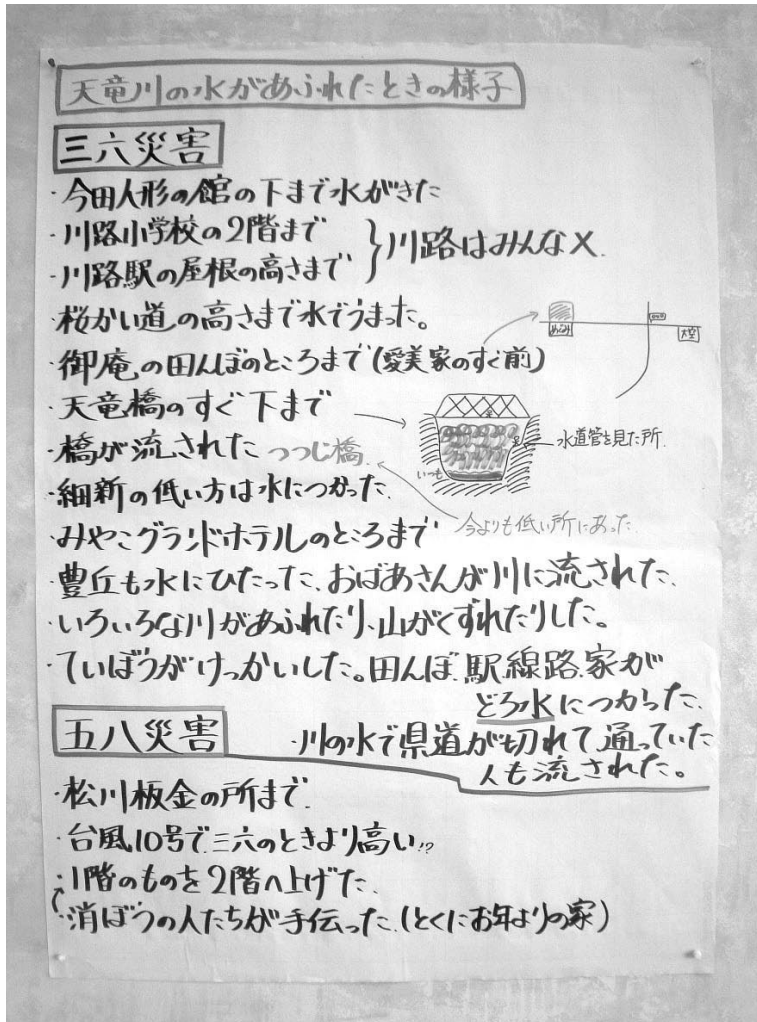


龍江小4年生の子どもたち

作ったカルタで遊ぶ親と子ども達



■「川と人びとの暮らし」で子どもたちが学んだこと



天竜川について話し合うなかで「かつて、天竜川で水害にあったらしい」ことを知った子供たちは、家族や近所の人から聞き取り調査を行いました。そこでわかったことを手がかりに、学区内での現地見学や祖父母からの聞き取り調査を繰り返し行いました。

どこから土を運んだのか

番入寺ボムボウジ - 拓人家の上で、今は工業団地
純平家の上で、工場がある所同じ
四区 雲母のあたり、今ヒカリパークがある所

・実地地をつくる前

川路のそば
老人ホームの上 - 土を運ぶための道路を父おやが作った。

どうやって土を運んだのか

山がひとつ
なくなるほど

・大型ダンプ - 11トダンプで225000台分
休みなく運び続けた。高さ4.5m

いつごろつくられたのか



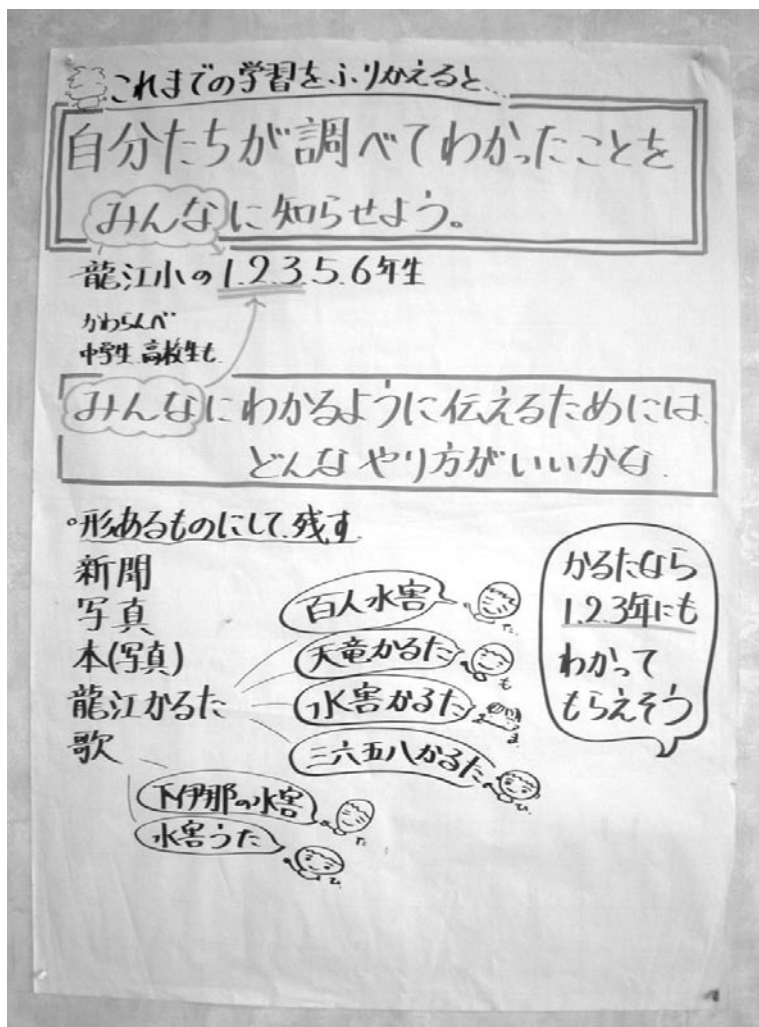
・7年前前、7.8年前前に土をもったもった
①始平成6年の2月 ②終平成7年行
③始平成5年11月～ ④終平成13年前
⑤平成元年～ 数年に1回土をもつもつ

4年生の
みんなが
生まれたころ!?

どんな思いでつくったのか

・もう水害が起きないことを願って願
・水害がもう起こらないように願
・水害を二度と起こさせない願
・もう二度と起こらないように
もし起きても、小さい被害で済むように願

水害を防ぐための堤防づくりや盛土工事が行われたことを知った子供たちは、治水対策事業についても家族から聞き取り調査を行いました。また、どんな思いや願いから工事が行われたのか考え合いました。その後、自分たちが調べたり考えたりしたことのまとめとして、天竜川総合学習館「かわらんべ」(飯田市川路)でも学習しました。



水害の学習を振り返った子供たちは、「自分たちが調べたことをまとめて、家族や地域の人々に伝えたい」という願いを持つようになりました。さらに、「形のあるものにしてずっと残したい」「弟や妹にもわかるようにしたい」という思いをも叶えられそうな方法を話し合い、「かるた」を自分たちの手でつくることになりました。

「かるた」の発想は、自分たちが身近に親しんできた「龍江かるた」（龍江公民館刊行）での楽しい経験がもとになっています。

■天竜川のことを勉強してー。子どもたちの感想

自分たちのこんなにも身近にある天竜川が、たくさんの恵みをもたらしてくれていたりと、ときには大水害を起こして、人々を苦しめてきたことを子どもたちは学びました。

身近な人からこの川に関わる話を聞いて、あるいは実際に天竜川を歩いてみて感じ取ったことを、この授業を受けた子どもたちに話してもらいました。

龍江小学校4年生

はやし めぐみ
林 愛美（林 勝重さんの孫）

こんなにも身近な川でたいへんな災害があったんだと知りました。川が増水して人が死んでしまうなんて、水って怖いものだと思います。でも、水害以外にも、川の勉強をして知ったことがたくさんあります。たとえば、天竜川は諏訪湖から流れてきているということ。諏訪湖からずっと伊那谷まで流れてきて、太平洋まで流れているんです。だから、この地域のことだけではなくて、他の地域の水害についても知りたくなりました。

いちのせ ひとみ
市瀬 仁美（市瀬 さだゑさんの孫）

ふだんはゆっくり流れている天竜川の水が、三六災のときにはいっぱいになって、水害を起こすなんて想像できませんでした。実際に天竜川沿いを歩いた時に、しぶき荘（天竜峡近く）のところに監視カメラがあるのを見つけ、いつも川を見守っている人がいることを知りました。

いちのせ しゅんや
市瀬 駿也（市瀬 利紀さんの孫）

水害で家が流されたなんて、水の力は凄いと思いました。授業で川に行ったとき、天竜川の最高水位を示した石があって、自分の身長よりずっと高いところまで水があったんだと驚きました。しぶき荘のところには、泥水がついた後があって、これもかなり上までありました。「かわらんべ」のビデオもとても勉強になりました。川のことを勉強した後に台風が近づいたときなど、天竜川の水はどのくらい上がったんだろうって気になるようになりました。

ささき ほなみ
佐々木 穂波

川にはチドリの卵があったり、灯籠流しをしたり、楽しいことがいっぱいあるのに、水害のときのような怖い一面もあるんだと思いました。私も、しぶき荘に残っていた泥の跡にびっくりしました。泥水の跡よりも低いところに立ってみて、「もう自分たちは水の中だ、おぼれちゃう」って、そこでも怖くなりました。

さわやなぎ まや
澤柳 摩耶

天竜川にはお父さんと釣りに行ったこともあります。ふだんふつうに遊んでいる川が、雨のせいで変わるんだと驚きました。今もたくさん雨が降ると、「ああ、川の水が多いな」と天竜川の水の量を気にするようになりました。



司会 なぜ、総合学習に天竜川のことについての学習を取り入れられたんですか？

小林先生 水害を経験してきた地域があるからこそ、そこに生まれ育った子供たちには天竜川のことを学んでほしいという想いがありました。水害について調べることが活動の中心ではありましたが、天竜川について学ぶことを通して、「自分たちが生まれ育った地域をより深く知ってほしい」、「ふるさとへの愛着を深めてほしい」という願いがありました。このため、水害という事実だけを追うのではなく、天竜川での楽しい思い出や天竜川に関わる人びとの営みに触れられるように学習を進めてきました。

そして、自分たちの学びを「天竜かるた」という形あるものとしてまとめたことで、それを手がかりに家族や地域の人びとと関わる活動へと発展させることができました。

学習を終えた一年後に、みんなでつくったかるたで遊びました。自分たちが調べたり、学んだりしたことを思い出し、「天竜川の勉強は楽しかったな。」と思い出す子供たちです。ふるさとの川について学んだ楽しい記憶が、地域を支えていく力の源となってほしいと願います。

参考文献

- 『天龍川川路水防史 続編』 2003年3月
飯田川路水害予防組合
- 『濁流の子 伊那谷災害の記録』 1991年6月
建設省中部地方建設局天竜川上流工事事務所
- 『続・濁流の子 伊那谷昭和36年災害をのりこえて』 1993年3月
建設省中部地方建設局天竜川上流工事事務所
- 『水難の里にいきる 川路三六災回顧』 1981年8月
川路公民館広報委員会

企画・発行／国土交通省中部地方整備局 天竜川上流河川事務所
〒399-4114 長野県駒ヶ根市上穂南7-10
Tel.0265-81-6415 (調査課)

編 集／ユニプリント (株)
〒399-7302 長野県下伊那郡松川町生田900-1

印 刷／

「語りつぐ天竜川」の発刊にあたって

南アルプス・中央アルプスという日本を代表する山脈の間に形成された伊那谷と、その中央を北から南へ貫流する天竜川。天竜川流域は、美しく豊かな自然環境に恵まれ、古来より人々の交流が盛んで、固有の文化が育まれる等、数々の天竜川がもたらす恩恵に浴してきました。一方、名にし負う“暴れ天竜”は、昭和36年災害（三六災）に代表されるように、豪雨時には日々の穏やかな表情を一変し、猛々しい牙を剥き、人々の暮らしを脅かしてきました。

天竜川上流河川事務所では、天竜川が“母なる川”として優しい微笑をたたえ続けて欲しいと願う人々の切なる気持ちに応えるため、半世紀にわたり、地域の皆さんの多大なご協力のもと、より安全な天竜川、より親しめる天竜川をめざして河川事業や砂防事業といった治水事業に取り組んできました。治水事業の実施にあたっては、流域内の自然環境や伊那谷に暮らす人々が長い歴史の中で築き上げてきた文化等を十分に理解し、地域の皆さんとの意見交換を行い、事業に反映していくことが大切だと考えています。

「語りつぐ天竜川」シリーズは、天竜川に関する地域の知見や経験を収集し、広く地域共有の知識とすることにより、地域の皆さんに天竜川に対する認識を深めていただき、よりよい天竜川を築いていくことに役立てるために、昭和61年度より発刊してきました。シリーズも60巻を数え、好評をいただいておりますが、これも偏に天竜川を愛する地域の皆さん、その気持ちに答えるようとお忙しい中ご協力いただいた執筆者の方々のご尽力の賜物と深く感謝申し上げます。

近年も自然災害の猛威は各所で報告されているとおりですが、天竜川流域においても、次なる豪雨に備えたさらなる治水施設の整備に向けた取り組みが求められています。天竜川上流河川事務所では、「安全・安心」「環境」「交流」という3つのテーマをもとに、川づくり、地域づくりにこれからも努めて参ります。皆さんのさらなるご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

なお、ご執筆頂いた方々には、自由な立場からお考えを披露して頂いておりますので、国土交通省の見解とは異なる場合がありますことを付言させていただきます。

国土交通省中部地方整備局 天竜川上流河川事務所
事務所長 三上 幸三

「語りつぐ天竜川」 目録

- | | |
|---------------------------|--------------------|
| 1. 伊那谷の気象 | 米山 啓一 著 |
| 2. 天竜川上流域の立地と災害 | 北澤 秋司 著 |
| 3. 天竜川に於ける河川計画の歩み | 鈴木 德行 著 |
| 4. 総合治水の思想 | 上條 宏之 著 |
| 5. 総合治水と森林と | 中野 秀章 著 |
| 6. 伊久間地先に於ける天竜川の変遷 | 松澤 武 著 |
| 7. 天竜峡で見た天竜川水位の変遷 | 今村 真直 著 |
| 8. 村境は不思議だ | 平沢 清人 著 |
| 9. 諏訪湖の富栄養化と生物群集の変遷 | 倉沢 秀夫 著 |
| 10. 諏訪湖の御神渡り | 米山 啓一 著 |
| 11. 理兵衛堤防 | 下平 元護 著 |
| 12. 近世 天竜川の治水 一伊那郡松島村一 | 市川 脩三 著 |
| 13. 川筋の変遷 一天竜川と三峰川の場合一 | 唐沢 和雄 著 |
| 14. 伊那谷山岳部の降雨特性 | 宮崎 敏孝 著 |
| 15. 天竜川の橋 | 日下部 新一 著 |
| 16. 伊藤伝兵衛と伝兵衛五井 | 北原 優美 編 |
| 17. 天竜川の魚や虫たち | 橋爪 寿門 著 |
| 18. 天竜川のホタル | 勝野 重美 著 |
| 19. 天竜川流域の村々 | 松澤 武 著 |
| 20. 小渋川水系に生きる 一人と水と土と木と一 | 中村 寿人 著 |
| 21. ものがたり 理兵衛堤防 | 森岡 忠一 著 |
| 22. 量地指南に見る 江戸時代中期の測量術 | 吉澤 孝和 著 |
| 23. 土木技術と生物工学 一生きものを扱う技術一 | 亀山 章 著 |
| 24. 戦国時代の天竜川 | 笹本 正治 著 |
| 25. 天竜川の水運 | 日下部 新一 著 |
| 26. 総兵衛川除 | 市村 咸人 著 |
| 27. 紙芝居 開墾堤防 一下伊那郡豊丘村伴野一 | 竹村 浪の人 著 |
| 28. 昭和36年伊那谷大水害の気象 | 奥田 穰 著 |
| 29. 天竜川の淵伝説 一『熊谷家伝記』を中心に一 | 笹本 正治 著 |
| 30. 天竜川の源流地帯 | 赤羽 篤 著 |
| 31. 東天竜 | 三浦 孝美 著
仁科 英明 著 |

- | | |
|--|----------------------|
| 32. 天竜河原の開発と石川除 | 塩沢 仁治 著 |
| 33. 伊那谷は生きている | 松島 伸幸 著 |
| 34. 天竜川の災害伝説 | 笹本 正治 著 |
| 35. 天竜川の災害年表 | 笹本 正治 著 |
| 36. 天竜川水運と樽木 | 村瀬 典章 著 |
| 37. 水辺の環境を守る | 桜井 善雄 著 |
| 38. 諏訪湖 — 氾濫の社会史 — | 北原 優美 著 |
| 39. 河川工作物と魚類の生活 | 中村 一雄 著 |
| 40. 天竜川上流域の過疎問題 | 山口 通之 著 |
| 41. 資料が語る 天竜川大久保番所 | 松村 義也 著 |
| 42. 天竜川上流 河辺の植物と植生 | 関岡 裕明 著 |
| 43. 水利開発にみる中世諏訪の信仰と治水 | 藤 森 明 著 |
| 44. 横川山巡覧記 — 『辰野町資料第87号』より — | 辰野町教育委員会編
赤羽 篤 校訂 |
| 45. 天竜川の鳥たち | 福与 佐智子 著 |
| 46. 遠山川流域の民族とふるさとイメージの創造 | 浮葉 正親 著 |
| 47. 田切ものがたり | 赤羽 篤 著 |
| 48. カエルと暮して | 山内 祥子 著 |
| 49. 伊那の冬の風物詩 ざざ虫 | 牧田 豊 著 |
| 50. みんなの三峰川を次世代に | 三峰川みらい会議
事務局 編 |
| 51. 三峰川ものがたり | 三峰川みらい会議
北原 優美 著 |
| 52. 天竜川水系の水質
— 「泳げる諏訪湖・水遊びのできる天竜川」を目指して — | 沖野 外輝夫 著 |
| 53. 天竜川の帰化植物たち | 木下 進 著 |
| 54. 中央構造線読み方案内 — 諏訪から大鹿村地蔵峠まで — | 河本 和朗 著 |
| 55. ふるさとの山 駒ヶ岳ものがたり | 赤羽 篤 著 |
| 56. 近世信州伊那郡大河原村の自然環境と人間 | 松原 輝男 著 |
| 57. 地名を通して見る 天竜川と人々の暮らし | 松崎 岩夫 著 |
| 58. 伊那谷の土砂動態 | 久津見 生哲 著 |
| 59. 天竜川と生きて | 下平 長治 著 |
| 60. 明日に伝える三六災害 — 川路・龍江の水害体験談と子ども達の取り組み — | 川路・龍江の方々 |

